

Bangladeshにおける学校教育と社会移動

—進路の複線化に関わる観点から—

平成 19 年入学

参加したフィールドスクール：ネパールフィールドスクール

調査国：Bangladesh人民共和国

水澤 純人

キーワード：教育自由化、進路の複数化、社会階層、階層移動

自分の研究テーマについて

近年、開発途上国では学校教育の自由化政策により、政府が登録・管理する学校以外に様々なタイプの私立学校が設立されてきた。Bangladeshの初中等教育においても事情は同様であり、政府が認可した公立学校以外に、NGO による学校、マドラサなどが存在し、複数のタイプの学校の存在は統計レベルだけでなく一村落内においても見られる。

一方、このような状況に対し、Bangladeshの新聞紙上では現状が均一な国民形成の障害となっているといった論があり、また途上国・先進国問わず、教育自由化のメリット・デメリット（消費者主体の自由選択論/弱者の排除）を巡る議論は盛んにされている。しかし、こういった論では、教育が社会に与える影響を、当事者の側から、卒業後の結果も踏まえた長期的なスパンで見る視点が欠けがちである。教育後の結果も踏まえ教育が果たす社会的機能を考えることが必要であり、その際教育社会学の主要なテーマの一つでもある、教育を通じた社会移動に注目したい。進路が複線化している教育の現状はどのような社会移動をもたらし得るのか(得ないのか)を、Bangladeshの社会経済文化的なコンテキストとの相互関係に留意しながら検証することが研究の目的である。

フィールドスクールから得られた知見について

フィールドスクールで訪れた複数の村での聞き取りから、住民の権利や経済状況の改善を目的とした外部者(NGO、援助機関)の関わりが、住民の意識や生活を大きく変えていることを知った。チトワン国立公園付近に住む村人は国立公園の設置により奪われた漁業権の回復に向け、NGO と共に権利訴訟の行動を起こしており、また先住民の村ではし尿を活用した発電機や灌漑の際の水力を活用した製粉機が活躍していた。一方で、住民が直面している困難には、ネパールの複雑な社会経済的要因が関わっていることを実感した。実務家として将来関わる上では、働きかけをする相手が置かれた状況について多面的な点から考慮することと、地域で手に入る資源を活用し多くの村人が生活の中でメリットを実感できる形でのプロジェクトが求められていることを学んだ。本スクールは、9 日間という短期間にも関わらず、平野部から山間部まで広範囲に渡る地域で、村人や大学研究者、地域の開発実践者といった様々な立場の人から意見を伺うことが出来た。その過程で、ネパールが複雑な地理・社会・経済状況を抱えており、それら個々の村が直面する事情へ影響を及ぼしていることを学んだ。ASAFAS では分野を越えた総

合的地域研究を提唱しているが、総合的な視野は研究の場のみならず実務の実践においても不可欠であることを学んだ点で本スクールは非常に有意義であった。

フィールドスクールで学んだことがどのように研究に生かせるか？

ネパールは、私の研究対象地であるバングラデシュと共通の問題・状況を抱える国である。国家財政において開発機関の援助額が大きな割合を占める点や、出稼ぎが経済発展の手段として期待されている点、また、教育についても急速な就学率の向上や私立学校の台頭という同様の傾向が見られる。教育を通じた社会移動というテーマで研究していく上で、このような共通点を抱えるネパールはバングラデシュの比較参照点として有効である。今後研究対象地についての理解を深めていく上でも、スクールを契機として身近になったネパールへの知識・理解をより一層深めていきたい。

写真 1



エリート私立学校(ダッカ市内)の校庭風景

写真 2



農村の私立小学校の生徒と先生

写真 3



小学校の試験日に、子供の様子を窺いに来る母親